一葉抄

六之上

特別
へ12
5127
9

藤のやかた
権
し女

一葉抄第五

薄雲

巻名ハ哥をもて号せり源氏君ホ
前乃冬より次乃年の秋迄のことあり
はゝき所打目くへきそえんを
河 前のへてくまゐりもうすとてあかのまハ
つゝき所のさはくしとあつれと云へき
いとひいとひてうすく 河 ねてれ後さく人
のつゝかうハいとひいとひてゝさくもなく
へよいよやうしみりひきゝ迄あかりとハ
引哥の心をいひいとひてことハ思乱

まさりやうなれハいよ〳〵やむことなくてハいへり
くてのミハひんなきことゝ云心あるへし
姫君と中宮をかくそえていふなり
たる後きのうの　一説　大略三条の時これ
あり従ゐ歳ひと例而帰て花山院也
九条まて法花若徳ありき
はくうひとく　源氏の姫君此ことは
くうひかくとみかさんとなり
前の斎宮のことなれ御かとゝし
秋好ハ梅壺まて十四歳上ハ之
発て十ちりとしへり大く前しりと

のそしりへし
さひとし立出て人色めき申しとみかとその
やあらん　東院帝とへうけるひ哉ハ我よう
あらそひへなりくとも業上帝しハめきま
すくりやさうれんとあり
后君さる殿のうさき人へてあらさきなし
はちよ寄しハ光さし出さり間申とし
小さうやりかれすることゝといひつゝを
多しをてり後付てよくまうゝへし
故大納言ハ北の一ッなき　大臣帝と此娘後
ハ更衣帝ハいてへてくゝなり

さて人ハあはれなるへきの　常門のれうさへく
のとく多く人ハいひてとこそ次とく
なはさしむるひとつやりの所しハ　常子
さら大臣家との常々のつらしてさく
かゝいかる人よハとさおくとなり
きこえまし秘てしも　若君の常なるなり
いとく多りさなれすのとさへそりたへ
若君の二条院へうつり給ひてめ給たり
さへ別へなまりとにはしく思ゆへきり
そはつくく所のとへしやなり
雪ふかき深山の月もしハ晴たりとも　深山

あつ様ことも雪のふるさとはさはいへ
はなれ人しなはなつかしとハ喜れあ
またとしよきことなり
雪ふかきよしのゝ山は　雪ふるきよし
野の山ありとも見つまよんとすりもみ
うみ此吉野の山にしうちのれ此あ吉の歌之
なつかしきめいあひ間らんとこゝあてやハあら
きなし思ひ出とてあはれくしれやうなりけし
わさしそてハ義いよひやらんよこゝあてハ
むつれりしとハ此人しもも一度りやしやう
のよハうくしくいあんとしとなり

いまゝりゆくすゑたゆくし　かくされのすゑや
たうれのなしとてとハさしけ花の髪けゝし
らいぬしみあひあはせ　姫君の御髪の事なり
といふハ文のぬけたるなり
めつらしくきて出たるへり　明石上ハ浮舟八
たしかくきてもあはれはしかけしはの別
まハ西ひよりぬへあけ道なり　松風巻
おなくの内さるゆに庵し
ゆひあし給ひとふして道ハ
といふくあたりすりとあとかきとは　武隈ハ松
餘のすなり　又云武隈ハ二木のいあり

女こ源氏の御かたへ渡してまひらせ給ふ
りや又あの姫君と母君との事なりや
是ハ彩菊の説なり云々
ゆほしきり道と　明石のうへ思ひまゐらせなさる
御ためしのさたり　皇女の御ためしとてを
らる事ハ陽明門院よりのためなり
いひつゝやうるみんとゆかしとて　餘所
給ふやみるらんと思ふ次つきハさかなり
みしゆきてとこしひ　二条院なり
めくてめし出し　紫との御方まてなり
物あひさかしらしけらん　あひよあひかねて

双紙のかしこ葉なり
昔のことはりめしおかれは　上臈人の名なり
世をのかれし宮人の出入かはりけるの
なにはをしめしくやみしなり
色ことなれはゆるされぬ　和 肴は神さかなる人
八千艘とはこのみさしきをしくきにとてまたあれとも
禄 今の世しはる公人部秘なり
大井よりは出つきてしもとのとさんとおは
是をくり　ときなりとはとえ能多
乃れしきしのころなり
年もかへりぬ　源氏三十一歳なり

なかしれ程の八七日の御ことはすこしおき
年始の礼なとはすこしけしきもかはる
東院の西ハ御方　西對花散里なり
こなたの御あかりさ　業との御かた
別當とて　一臈此者ハ家司なとなる
中くらゐまてなり　源氏よりはまれ
此ハ言ひねは申しめやすきこと也
梅の御ほとし　花宴 常よ直衣のうこう紅藻
若竹のとさくら色としへり
あそひくりても　侍 梅人の弄絹に
舞をもおさ子人の　女童人ハ昔若とと讀

多まきうめさいはらの人のちくなら
あはれともまためとおつり
きりてみなくあはれともさ◯こむ　中々ことゝハ
そそねしまゐりてハとんとやゝゆるを
ゑりうんハちやくゆゑんよのようさね
うんハゆゑしんみんとありこの二首ハ撰人
のし葉とよりくるまへなりあはれとゑり
ごんと口すきと給ふりぬすく

河
於久良比止曽乃不祢止々女之
安春可千利已宇曽於已止於已曽
安春止毛以波女辛千可太你　二辰

川万左由世那波安春毛左祢已之也
曽於与左安春毛久祢已々也曽与也
俱子振人

梅まへなりなくしハおもしつ梅まうしくハいつしやなし
業上ハ上性まて母の分践さへあるなり
祝へハ梅まへの人ハけ御服よいつく地のまゝ
ぬるのと祢くりあて性の経とるへし
多いよの常にみえし　明石上の常にみえ
あるハ入道のへむけハある屋なりしなしけ
まとも大方のさくひとてもあるへまとゝ人
小さく礼多りとのよしなり

夢の浮橋とはいかにといふに　世中ハ夢の浮橋
とかく橋わたらし浮橋つゝ物思ふ人
是の尓しの道の有ふ者のおもふ者の心
例の物語也けるに也ハ　多くの人のおもふ也
くさきしいふへきなり
寂ハて浮世の事也と　おもふなり世中ても
加さいり事とすなはちなりとかけしや
こハいふ事なし　宣はくとまし給はゝや
ちかき山寺　横川ハ小野ト横川ちかしと
山居してい為しき世の事也ハ思てくる
おもさい有へし

女三の宮源氏ハ仕えしと見る利　源氏おもと
思へて也やうしハ世の中を見とおもひて
有ける人おもへるに　ひたすら浮橋の事なり
その人物語ぬる行く二而を見れぬ　世の
大臣　あるひのふく乃文なり
浄土とし道ハうまく行くあくしく　十宮
第ニ女ニ物ならぬ也し
内也物ふくのみらん浄への子らしハ物語し世の
事ありうまう　りこ乃物さなく物もしまれ
是しハく浮しりて物語り世の浮世とも
世の中のいつはり有しる有なり

むかしハおもくつゝしむ年と　三十七
是ハ女のつゝしむとしなり
いろ〳〵のいのりともありけれとかんとくして
くの事なきよし　ふかくつゝしみ給ふ
さて崩あり
院の御わつらひにつきて　薄雲の同
なにかしとつはらふ法を行て　源氏の御心
あるへしからぬ身なりしと　源氏の御こゝろを
焼なとのきえ入給やうにして　如焼尽焼滅
法花経　経文なといひたるとも有りや
くとくのとくしとすゝむるよりてし　云々

ありけることハ　人のなくなりしよりてよ
去年よりはひなりとことハきさきなりけれは
人のくるしきなしとて去年を年ハ御禊へ
つきうるはりこの物のことさりして
女院より官位なとしぬる事なり
殿上人なと此へて一年よりきまりて
諒闇の服衣の事なり
此とし斗ハ　深草の野への桜し心あらハ
山さくら木とも　山の木とも有なり
入日さす峯にたなひく　此みともして見る
の色にや又薄雲の女院をもちありやや

まくつらしハわもわもれと思ひやるものなりん云て
人きこぬ所なり是ハ　今とて書はしく此かりなり是ハ
此哥此面白さと人間めかしき記者の筆にて
右入道殿の御母后の御世に生　薄雲
の御母先帝の后也事なり
いめし此御乳とも母はく去ても
御乳母と添とりおもとおきの様なるへし
天眼　てんけんとよむへし
肉眼乃一乃帝釈梵王未来照見なり
法師ハ此きりといへとも　寛弘保奉事
其のためしとおほしけりしや又大きさま

てうさしあるの方なり
ちんせんのあつき道とて　秘密の事
かれとも人の撰とかくされたるハ法よし
てへりく後あるおしきとなり
くりてよらぬ事ありやりいく侍らん
源氏の御子なりけるをしめされあ
よりの出来て云とりやとりいて給
佛天のつけあるにて　ワきとかく参しらん
みんとりもろなり
日さしはまて光を世に　早朝あまりて
もと云ほとの○ハ知らく行し又よほりあり

其日式部卿の法子　桃園家の事なり
ゆへにいひけり　尭湯ハ有洪水大旱
之責　高宗成王ハ有雉雊迅風之変　陰
有小異不失大徳ヲ　後漢皇后記上　聖代といへとも不
思儀なる事ありけり　和漢とも不可勝計也
河海にいへりし
かきたし由を娘をにてつくりて侍るなしや
源氏の作者は此物かたりを云り業識の詞なり
いよいよ法くきんとせさせるかはり　前に
もれさえのりて世にあらはれたりとかや
ありやなしやなりなるを書しけり

唐にはめつらしからぬ事にて　秦始皇
ハ荘襄王の子として即位ありて始
皇の母太后嫪毐呂不韋と云臣下
に通して所生云々　本紀
日本にもいにしへハ史に法諱ありし事あり所なし
陽成院の御母二条后ハ業平密通
ありしなといふへし　伊勢物語にも見えたり
あり但たしかなる文にハなき
なりとそ　見花鳥
一世の源氏納言大臣にありて後々
光仁天皇　元大納言　宇多　源氏の　やうの

例ともなき事なり
多く渉位につきて　従一位なりし　一條
牛車（キツシヤ）ゆるされて　牛ひきながら内裏に
いらるるのなり
と一きハありたんは　大臣になりたまてなり
さてハ改ともゆつりたまひて源氏へやると
くゆきもんとくいたるハ　藤のとのえち
しのみちのなり
この渉多あ後代みりきなけきさとりし
世間の前しりを代ふとの親子に渉
れ多くすとなきまし給しとく

むかし、さる乱渉うかしることなく
前しかれしき渉しることはあらま
りきよしありしこるなり
世中にさりしきこし事もなかりてやさし
渉さりしさんなれハ　下に作ハ藤原の兼周
音よし上の詞しつまやかなる女の
恋衣とみるとれへりしにうつさ似て
かくまでハとしや　河　いにしへの昔にそのといてく
さてこれハ神々宿けりる係　小町姉
もえし姫のむかし見たまひらあんハ
むかしはへ進みてへらんとハ六代恩

ひのすゑ　河をはるかにみえし艘とほく
さん花くしうめよりくさはさりとゝはよ
又はりていへり
と一ハのさまひさしつ　秋好とさうけ好よ
事とハ世ハうめ好よりへし
東院よ物かゝる人の　花の外のあすへ
此ころけしさハ世ハさりがうしるとハかはり
さうを好つんや　此ころけあるハの名
候屋しさる世ハさうとハ源氏の下さいある
とのあまへり
此門ハひろけさせ好ひて
于公東海人之
子于定国字ハ曼青家の門乃破故
候と父子于公ハ修くろハ门于公かいまくこの
門と高く大よ駟馬蓋入程よ立屋し
其獄の司そしてことと訓陽徳多り
出よ我子孫必家とおこるへしといひ
けりさうして定国太臣よなり其子永
ハ御史大夫よ任ハなり　御史大夫ハ大納言よあたるなり　家
の心ハ秋好の幸ハく源氏の一門も盤
昌きんとなり　家
年のうち抄のうのけしくの花にかけて
院にくりあまうへよ又さしなり

ころもは春の花のにしきをさらしてかさして
晋石季倫居金谷春花満林作五十
里錦障逢春不遊楽恐是白頭人 天
やまとうたには紅葉をは秋の衣とみたて 百葉
河 たつた河ハもみちのにしきよりいくたのあ
ちれるを秋のにしきとよまれたり
御てうのもみち御らん 昔の人のことさ
まあかりのあれハおほしてとおもひけしいつ
とかくの中にはやまとことの葉にハ秋の
あはれをこのよにまよひけて
せうくへかまよふなり

あやしかりけり夕くれ 河 いつとても恋
しからすハあらねとも秋の夕ハあやし
かりけり ハ羽林群藷なりとよまれたる
へきことなりと申思一所のさまよ
まての紅葉もむかしより
君もさハあはれとおもふ世 やそ物問
心しても人もきぬ思の多もあはれ
りしなふかきハ濁なり
いふにてよみてあはれをうしなふ事なし
紅葉のこと葉なり
はるかんとして つまかんしのたよりハ

はくしてつくるハ浅くる地とこそきこえ
中音の作ハつくれ人の心あしハ浅くせん
となり源氏ハ秋好の作さめしてつかぬ物
とい上ハなり上句よ似とをしてへかつき人ハ
かくよくあしきなれよしともりハよくまませ
給なるよしいよまてくへし

柳のえらし　のりかな音よる遠事ハ　勝
月表の音ハ数なりけ数所くしありつ又
柳かといよかちをあり
是ハいとかけなきさもへ増かりつつみかくさ
こまやかりよまきりけめて　源氏の作ゆへ

秋好と思ひよするを藤壺のしるよつくれ給
ひけりしとおもくて給へる也ハいともけ
けさるをハ見えしれけの作門の中宮
母く知りしませたる少なりかつさうれ
えしハ藤壺のこの作をの人ハ私給をぬか
き事なり遠しともさらいかしへハれ
年ハひさりてわくとら居りけるよ
ゆかりし方をあるへしとかりれ給さ
しるまよあり

ひはいし道ハきりしるやうとく　源氏の作
年としけめ遠ハ好みのえらのをの給

うけれやうしハちかくなれ給ハん思惟をな
きさへまさりてしうらやましとあり
物にしてなりやよしけしきへ給ふといひて
ほくよれつ道ありて　秋好ハ源氏の御
めいけれとなりやよしくゆくせんとて
ほてほしかやうりなへとく
君か是の明石のしハこめさまへ給を
せとの是はあさ道て多まよすけ
こと葉より見てしあり
あたれはしとてしれしゆゑやきをいとらの
ちすし句とまりて行へし

なてなりしとあふへき　明石のうへの事
つさハゆりゆかんとて
かの源とまかなとはし御けりよりしハ
次ニ明石にて御詠つなれとり行てし
いきりせしけるて道ぬ　此者御稽あり
明石にての地をみも大井にての仏殿
くもゆかしにし　又称舟のてりの御
ちれい行りにまうまとせくらきとしも
ちき道ぬしといへり
あさうしぬとてのゆりれと　源氏此御
行ましのあさうしぬとてさしてさらくよ

やとかくれぬ女まつなり
たまかつらしも　河　うらみしゆゑへハうれし
世中とゝまりかたしこゝろをとゞめきこえん
云かへたてかへし恨み給ふとハ女御恨みから
ハ後とし給ふうらみ給ふとぞ

槿

巻名ハ哥と詞とよりて号せて源
氏廿二歳の九月より冬までのこと
前の年の冬の末と同年なり　し
文数ハかりし事と　槿斎院なり
ましてはまての家し緒されたる人女五人なり
槿又桃園式部卿宮　女五　三宮　摂政 小方
前斎院女五院おなり
長月になりて　斎院御わかれにて先
別而よすこゝろひてしと桃園宮へより
りなかて見えさせ給へり　一説 今の佛心寺

桃園の宮のおしあり
女五宮　桐壺の帝の御妹なり
故院の御子なりとハ　桃ハ女五の宮の御方へ
同寝殿の西の東なりて　女五宮ハ東楼ゑ
外しまとゝ母まふなり
うらくうえみりえ給つるを御方に
三迄を一具なりとあり
より方に付ても　桐壺帝崩御以下
源氏源ニヘより給ゆゑ此子の為に日に
女五の宮ハ我命なきをとの給へ
こゝにわしむひてハかめぬ　人々とし文に

かならずしもよろしぬ人のすりつのへとゝとも
うしむつひてあそハあるおしきさうすや
三宮ニすしやよしく　かくへよゆりしハ源
氏とむろしりらぬまふなり
すうし弁ニゆり給　女五宮の御物語間
ゆくさきのもありつし桜の御子のすくハ
へ給し弁ニゆり給へなりくへし
三ノ御宮の三人よろしきれ帳の此をもけ
元
脈者此所の御簾の座りもりさうしハ
そひ宮の布と用ひ名よ木丁ニハ几
帳の上墨ぬりおして御さるてん

すしかへしハ是をよみたりけり
宣旨対面こそ　　藤 女房官なり
私さひはけり　久しくなりぬとい年
月のらくえは源氏のひかりきえぬ
慕此光頌云
ありし世ハみな夢にまかりてしとなんきあ
てりけさしやとこの頌へさきめつらく
新院の語あり是又まて見にれどしかとしハ源氏
の名此す甚外にえり夢此中の名に
すりとありくこひ頌し今なんなりけれ
りやとしとこのまとれとなり源氏の涙

とみよしと開帖はじきのへりや
人これそ私の中にして　こら常情さ
えは源氏若つて涙を書く世て始り
今頌にれ名まいなり
とまなるのいさめなこそへ頌なん
新院なりわかれめ書ていさめとめ
頌しとの頌いへこそハてこ付りなり
其てまりしきす　源氏の方なとへ
てあしとて　人つてなくて開しなやとへ
ゆる志りて此の女ころし給へと　上の御て
此姿のなさめしれりしといひて書

ともに御年ハ四しゆとハれうしうしゆ女
はすとい御位のうしろハあらさめり
とハれ位ハ父の御年より七稲高とあり
わへての世のあられはりと　朱院の哥
すゑくくのこと治まる世とも成林や
いさめんとよみ給へり
これとの稲れ　中戸稜の詞しあり
心ハさいたんと吹たる岩とあり
清とそうハ志あとの風し海世ありさ
をしめうん大海のりうし
志はての風ハいめいより吹風なり

そうきと神やしろ　　あらしみえつきと
神ハをさにてと久と三つく清き舟しと
ていそれてつまれかくきとハしつり給ふ女
かくいう心あり　いこくよ女房よ
詞やうくらつみ御ありなさいと
いうてや分縁なり
世をしらぬ風つ里とそとて母り
たちてかとは母のしけされしと
いうくり御膳への事なりくし今そ
とくしとハうの御りの社殿色とよ
よくきとりてくなれされ御りて有

かくてみんなまゐらせしなり
宗祇やうありし　文明九月廿日比にて
見し物の所かへて止思　見し物とハ
ちくあくの事にてしのびすぐれたを
あひ給ふにハ何くれのへしきりなや
こゝろんとハ葉し侍りへくたへぬる
めゝ此へしあふるのいつきはゝにへなり
ありハ
秋までく露の御ことし　あさくれ此に
止ハ無此にまさりてやなり
なりひにきつし無まゐるなり
かりけり此御事に　さりるやうなるん

と云なりにれなりて所けくなとあり
あはせひの此の此　眼者なれたえんな
数へとりや書無まゐるぬなり
人の御作りしゝしゝ御なりきり　作者
の御へつきてすりそをつきてしく
まうひなるハあしくなりなどゝしてゆし
ふひ書まひくりしと止ハ文かいつ遠
りてゝなれぬ御をし此なく　跡院の
源氏よ一句しハりてかけ止にし　あへし
らひ無まゐとなり
ゆゝゝ入りてし　かく文字あるる

ひんかしの対にて　二条の院なり
宣旨とむかへ給へ　かうふり給ふよしなとかきつけ
へく　さいはひ給ふへきよりてまつる事
人ことに八朱雀院よりつかはしへくさうしせ
あかぬきハのよしとハ源氏ハなかれてもたれ
ほしもひぬ事なりけりとてハみな
双鳥の比なり
ありかくても　そこに次つきまつる花
すゑなりよの人よりもめてたく
もとはあさくその比なり
家に付てめつらしめ給へし　きりつほと

あさえとも人のいましりつくひめ
ところめ給ふなり
たかき道よりいひなしあひきんよと　紫への
まくよの給ひなりなともなりや
同すまひし八御しまへと　紫上朱雀院御家
の御女て御たらしもんのなり
ちかよりたまて　みな道給ふこと〃しん
はしつひあつかし紀方の八あそめ
むかしきのえ乃御八なり
まめやかにしほりしと思ふをはいろいろにもい
かよしめ給ふ次　二まてよあ世めしうり

そ之方あんと見えてぬさまんかのめし
なしいのしと悔りて悪し
人のよりハむれりなまし此　人言之曰とハ
夜のくさびくさもといつる教へ仏ハ大事
ハ人の心よりハ信ぞさなれな道と
色気ハ美なりけりやしとふる教へなり
神事(カミワザ)なしとも定まりてし　花の桃園
なしのくる道教へしまてなり
仏よりハかかりん人もや　襟の貞心あ浅
しゆるしなり
法ことなしや　そりとなれしと七教へ

たふやき夜此　須磨のあまれたかや
よ夜なれ秋ハらくのとよりりまもり
宗道
なれ秋も教えけふ　河なき道ゆくハさま世し
なき道ハやともまの浦ちかしふやあさまと
まくれけりるれん
文小治せらるこ　源氏女文へ出
頼の人へゐしと果しきいし知まへなり
人の文も深り頼りしと　ゐりれ出頼ん
其は母ふまぬなり秋ても来けなふし
宗のりや

うつほにつゞき　さしもなき神なり　ころし
此物かたりを見れはいかにも世のありさましる也
源氏三十一巣なりうち此外にさらにあり
桃園の其ころはまつりくるしみありて
そのかみにみあり花鳥には紫京に縁
出生年あれはさなる世のあるさまなりとて　ある
えこそ見れ　引そふることは云事なり
いのちをきこつ　源氏いのちをもたることかなしき
きこしめしなからむと　此ころあらんやと
多ねこ日となり　源内侍として葉なり
此家此作てしれく　源内侍尼なれは女出
又此御才子とも有
此者共は一冊　源氏親も此しとの物なり
とられとといふて　付ての物也　源氏
仁乃へ給うて　いかなるの　とも見ても物
為よりあへ云ことは物なり　此方御
と云く書り給ひし旅人義歎有
いひそしのひ有て　凡とすしといひて
作たまふ今は文人の人もも　歌へ式
此方と引へは源内侍の御気色なり此
此は元の記人よりもしかりなるを
行き我方の局へやくしりなるの

とやゝさて身をうしといひつゝしあかるて
又まうりし人と見んしやさいの哉しけると
見る人の心くあはれしてなり源氏の作て
ときこゆる老のやうなるふるえんハ世と
の道理としてかなしく候なり是ハ内侍か
かゝるさまかゝハりかなしきか作なるへし
源内侍ハ好色頗にて老五十七八と云の
今ハ七十あまりなりぬへし
年ふれハ此のへりはてゝなけきたり
藤壺より年をとりかく身にそへて
けりハ命のおはりさて身よく源内侍なりき

年をへし此糸竹 子よ深く親と読みて
身とゞへて後もましりけるよ 此世をへてハ身
婦女や女ハ花これなしやとなり
よからぬ物乃世にまよひとか 清少納言
枕草子にもさまよひそめをかなしきを
さゝすれ けりもされこそなり
仏つくり乃と 悲しさハ仏りてかなしきな
哀しときこゆるてはなれぬ
あはれなるかなハ見えん 新院の貞仏
と何ハあはれなる人の仏乃さかなれよ
やうしハ見えんかしとゝぬるなり

いさら川　名所とも説ありしともあれ
く光中しらしの時有りいさらいさや
あまたの説あり　古太つきの扇の山なる名
え川いさらえへて今名のうちな
ろうひとつかしして　源氏の人乃ん
とやありてとし多る事あらハゑてまし
きあとし女川ら乃ハよあり
家し人の月しみ地し紀し　新院の御ん
の内へ三十上り下の詞御へつひ紙
地よ魚し屋さしくみらくあ紀すへ
えみ七御也　大親の文みを越あとハあれなり

人つてみれいうへ　地傳とられいうへあるみすへ
そし出とうりをは傳を　新院まて法しの
あし三月おねりし七事なり
地とあひとと八地にしさてと　御出家みすへ
御ちらかうみ君さらい　地りちらうてむ
はひ時おねあり　気以ちらかうあまくと
あ遠しとも　京畿よ八月ふしまて此物語よ
北親みはし
まひてやられしも　源氏の御仏のくるへ
引うへあやかくよへつるしなる事と
あしちいあいのまとまでいつり

きしかた人の御ありさま世の覚えもおなしやう
にて　あさくらの宮の御なけき
物かたりにみゆれとむかしよりあまたの
なりて　源氏の御へのなりけり家の世
の覚あらぬ事もよくみゆれとも
あり侍まさりしは世にすくれたまひて前の
御思ひ為のも人のさけなきくし
多かる事なかに此を　権しけれは
何ひ給へと此比は浮しれ切なりけれ
家ちを於く　花のこの御事なれ
多くありし間しくなりて　覚え

源氏の物かたりにてのたまひ事といへるなり
けりいふ所の給へ　此物かたりは進化
ところなし多くの事をもありけりや
聞えけりやまた源　何しらけれはありとも
いれてつらふなしけり　さらはすりて
かくおんあらはしも
も詞人はかりし源氏のこ多くまかなり
すきよしきとあしふ　河
紫日記云
志らんの比此月にてあらきこゆる
こひのと人さてあるとてきよし志らん
の月夜にもまつれ清少納言の記

双六のしハ三ちんの月乗しうへ羽有(?)
なすしれをまうしやらくは限ころしん
付く月く(?)へし言を
せんさいのひへく(?)し　雲しむしまらへ
未来の花をいづれへしむをれ女(?)
屋の形と思ひしゆたろ(?)
あこめ三く出らく　一説 帝出ハのきぬと上て
き仲出しろ出とめきてあこめかれ
うらやあこめハ中きぬし給ふ物なり
思ひさしけ給ふ女(?)牛すく　帯ハちる風
帯之　中人の殿内せしましの姿なり

三ろきハ　庭之三ろ　思ひよし女之
まちぢけて　咲(花)されけなりし杉有し
あつさ有しも　女房ハいりも扇を持ん
三きんさしつよくよ用なりや
あつけの上と　ちろと上ろてし
ある　貪(トン)字なりフクツイニト読
仏のりしけしいらぬ　ゆうしかろうしへみし
二(?)して地りし説し
中宮の北きへ出　烏帽子也雲の山まへ
水ハ月て火のなり
やかうしとひ出なる物なし　とひれた(?)

さしけりれ能りや
業の中へ入よましくれ　ニまなれハとこれなき
ニまあくいハきんくいあきなくなりのく
之業とし日やうなりしの好くきいに
こくハ誇のし〳〵こくいなつとい〈しと言
ふりつりし見けそひてかしとしきのとは
物えんしのそりとの多ましなり
承も多りひを海へよあそり　跡隠ハ
一眼とあうおハつのひ有通ハ源氏の孫
もみりのひしぬまかしけり
あさるおるとしあしりてなお通好へり

けるへの　作る法あやこしくもありける
そのそもこれとの好へハ　勝月秀なり
あり体見くもしハ与称あつとなり
さし　乃かしとえてり業との詩とし美あり
乃もえつていしやよく　源氏の詩何く
やきとさうの物からこれとハ勝ハあきちう
なりるのおつとりてなお通くろ人へと孫見れ
けのむとさいはことのなくそもつうしてへのれ
名法もとて多からし行き誓しまし
てうらあさしけして就くく人のとハ世間の
人のそのもの下の初し二まなりときもいけき

ことゝしらずしハ哥の法事なり
ゆかしめ給ふ山里の人とハ　明君とはよのつね
岩之寺しハおとしめ給ふ之へきとし　弟の
ことわりハやうらみのなすしるし川合
侍れとハへむつくろ人なりとあり　人なりと
なりつへよしは愛我の女なり我なり
東院ホ　竜散里此事なり
すゝむ方の此ハ　此此なる此ハ新古
やめ八月ハやとへりつゝ之枯済か
前栽ニ給はつ此御さ給ふへし
かんり　鬘のさまなり　忠岡中納人

さは荒の法事なり
よく我術なもいりたへしつ給し　横出外
思ひのほか言の名法をとりつへしり合
さしも嫌く筆とさふ給はよしなり
くさつめく首立也　書つめて八集
てゝ雪とれよ小ハ語の御字之此世
字くうさ孫とハられとのたなり
花　雪をよハ雪此新し逢をよし逢の秋之
一説雪しよハ雪のうほしとはよ詞の本
古今哥ま宅あるともまりまへとか雪し
れとと云ハ假名て名しなつしや

今をいさしくめかしきへ給　夢ともしらで
給ふらんかりかりの浮よの夢なる世にて事あり
ましをみえしやって　源氏の御事方
としこゝろ思ひなり
うけて孫ぬねえさびしき
とハ幸き心より源氏ハ仏中しえん給
年来の句りなりける義とならひ
切なりなりあはれし
なふまさ談して　世の常のあそて
ハうしひかひかしとなりなくれんの母
とろくいしすさしのへの事ありとて

うらみても御仏乃御心　ことの孫て秋
孫の信ハ巻しりなるしまてまり
ハ源氏とうつけなく云給い　れしまい
又し若けの色ハ御事と云世とて
まりなしものなり
あさく俳と　超世悲詞なり通世なり
御なかし蓮すこし残せハ　よりてハ仏しハ同蓮
みそけ紀人とこそへとしの仏しや
世よ人とこめの仏し　命ハ仏し海の世
はてしも親ともみえてさうやともれの
世ハ之流川しせくまあり

さありけるとや　例の説者の論なり

しめ

春の名ハ青と詞とりて呉に陽氏
三十二歳乃三月より三十四歳の十
月までの事をかきたり
年つもりて京に住みて　藤雲梁園にて
事かりて三月まてあり
夜の人　更衣なり
更乃宮にき　梁園の後世中の人乃
ゆゑのつらきおもひあり　新院のことに任
ちんとてものゝあはれをあらはしけれ
いふなり　春月ハ清和の天氣とかく

新院

条の比新院とての事ありて御引
出家ありしかバつゐになからへさせ給ふ人
にも条々御謀叛ありけれバ遂に流され
崇徳の院の御名の号を付まいらせし
くわしく書なせるありし給ふしと云て

大殿

御かひ義とも申しけるその末まて
太政大臣なりハ但し名まであり
今もとの日ハ　賀茂の御禊日と祭また
三日前に
ひとさやハ川瀬の浪を　前つかた見えしハ除
服の後の事也又御禊とありて見えしより

新院より申給ひて　除服の御いそき
なりしとハ云ものいけるかしとありて放氏やり
是ハ放氏の河瀬の波を云ハ瀬の事也

紫の事

なり衣なれハ　放ち名ありあり
つくしなる袖にも是ハあらわれけるに　大方ハ源氏の名ありて有と
又も上あれも御也あるなり

放衣

放衣きしハ此ちにて　一とせの夏にうり
利くハかなり涙ハ瀬まつかはしてゐるの有り
神句詞と如しものさまに奇まで有りし
すとあるハさん　文の句にもそあるくとこそ

こゝにめてしかるへし
大やけさきの　大方みといふへきなり
これらことを　女五宮朱院にて對面
の時源氏のすりとのゝ申給ふなり
古家をとふらひしたまふ　桃薗を構乃
朱院におなしくて源氏とまうしきたる
事となけゝきのかひにいへるなり
ゆくのこり　朱院にまいりて又源氏乃、
めいまつりし女まうすのなり
にとちしろめくく　朱院の御かたなり
つの御方つらく　源氏のれうこゝろなり

御元服　冬君十二歳なり
故殿おはしく　二条北摂政家にてありしや
よしへよりや
右大将殿　たしかなるとの事なり
四位になしてんと　親王の子ハ元服の
後やかて從四位下に叙せて源氏君ハよ
の常也源氏の同例しあさく有て親王
乃子の准して四位に叙し給はんとお
ほしけり　さ道元服計酬有よしなり
ゆかりなりけん　ゆかり尾りなきなり
あさきにて殿上へかへり給ふを　一世の源

氏の子ハ其﨟徒五位下なれハあけの袍
と思して昇進させへきにし冠者君あさ
きと思ひたる所二のへあり五位﨟より
いへとしてましく叙爵をさせ付ハ四位之延喜
縫殿寮式に云四位ハ深茜し凡て あさけより
故にあさきまてをとまへりとしたり一云六
位七月とよりの袍とあさきとしたり深緑
の名ハ藍と黄蘗とにて深くも浅黄へ
乃色よりはひきけれハ色よりて三条代上
のめ乃しの詞し六位宿世としなし夕霧
此の事ハあさ今まりとやいれニ成へき

三あ進ハ六位まて昇進ありしと云へる
りや皇子なれとも臣となりて後ハ位
下に定まりたるハ天皇の徳にて上の徳と称
のつかさ叙ニ升之の如し桐壺の巻に云て﨟と
云ハ天皇徳と云ニ升三ト云 字の心あり准源
氏此時冠者君ハ四位人にもあるへきハ四
位の人乃袍にを 殿上してつるしハ童殿
上の人之服にて進ハ又成るとゆるして
ハのをれ夕霧之服の後殿上をゆるされて
といつとまして 昇進まて人の越えられ
かしみとりおさにてあり

大学の道よ　左大臣冬嗣公子孫三条大
臣良相公大学の道を習ひ給ふの例なり
二三年といたつらのとしに　天子よ宮つかへな
しけれといたつらの年といへり
かしこき御手より　桐壺の帝の御事なり
文才 もんさいとよむへし　文のさえ　いさ
されおしろき　めましろくよといふ字をあり
こゝろやすかるへし
やまとたましゐ　日本のめあしれなるへく
ほいの世のそりし之　無学者譬如無燭夜行
せまりぬる大学のそうし　せまりくハ窮者なり

除目つかさめしの籍に内豎窮者といふものを
よくハ大学の衆として年久なりて昇を
なしをぬへなり冠者君とハさやうしハ人の
あなつゝし少しあり
大将左衛門督　左衛門督ハ大将の方なり
あさ名付なり　字生の入学の時文章
院の寮監か書きて次名簿よ字と書
なり聖廟御字ハ菅三　三善清行
のあさ名ハ三耀と云り久秀の字を源
なをしあるへくよなり
めゝかしくいぬりしき事共して　其儀を

此道を道ならぬと心得る事

中々とうけたまはる　道によりて道ハ

大事小事ありけるなり

三拝してつとむなく　下座を上へさすの

されとも三拝してさだめてあらんとなり

家より外の茶なら　借楽来なり

されハ我まゐらするすゝしき　身ハとしハい

法く女くも一切しそうして神と為

色しありて　銚子として酌とれハ道代のすゝ

今も芸会の時ハ銚子女くさるなり

ほとしとらうまつらんとて右大将殿なさし

儒道のおしゑの事ありけれハ席へ三卿

のくらゐをこりおへよそすりひとつをかへ

大将ハ致仕ゐなかくれすゝ民部卿くさ元な

此くなく　実にてなり

としいけるとあるし　垣下のきんさしと

いはすあり大饗なれハまても人数の外也

人まじハりもとうのきんさもしいはあ

あらし八まあり宴ありてをも大臣の氏な

らぬ三卿ひきと　此帯　かりともいはへとしハ

此ほとに畢下の相と人数のかとなるとこ云

是れ此ろにとハ心をろしいきしおへ

こゑもしとあつまりしといふて　三躰なり
かのりしといふてしと云へたり又儒者に
承するは修ともゑ申すりなくてハ
文字のうへ大やけし仕るてハ分別
とまりかたねとはさしかりしく
てれハさしとなり　秋末独のやうしりてなき
なハ中しとこの海し外とハいふへ
なりさし　風俗なりしなりたしと云するを
河なりぬしやなりさし太夫もくてなりさし　儒
とらたをはなん　三のハ作らんかしたり
なりたえんなる　けさやうれのなり

はなつかしの海し　猿楽ハ昔かくもありけて
ゝやめのまゝとしてハよ三の入ぬすへきも
かまハいろれて大学家源氏の作よ
はさこれハさりしくとなりてきこへぬなく
まくはなし　けさしすりあり人々とあな
とすりもさをはいしまかく式作なりまん
三しありあるへ此脚なりへなり
さいこん　ひ人ハ秀句といふなり
題のさしえりて　ひ翰林(カンリン)の人出題すへ
韻の字ハ切韻とて何字とりつて韻とす
と云何もあり又題中より韻としてて題

のゝ文字は中平声乃字とよりて韵と
するなりともありて又何の韵なくとも作者の
心にまかせしるなりとも有なり

右中弁　無失雅　九イ

枝の雪は　車胤蛍とあつむ孫康
雪とあつむ

史記といふ事　令曰凡学生在学
各以長幼為序初入学皆行束脩之
礼於其師各布一端

史記といふ文　百廿巻へ
あるし　大学寮なく学生と心は

と寮試と云なり其試とまり源氏の作前
なくさせぬまじかりけり　試は八史記をよ
申しむるくらなんより〈〉と擬文章生よ
勝りて擬進士也と云〈以下略〉史記の難儀とてよ
みよ条は中にも三条と通りしと及第とは〈以下略〉
左大弁式部大輔左中弁　誰左右し左中弁は
良清の事はやましらぬ清と左中弁と云なり
ちかせのへさう想き　としゆへしらん
なしするなりけり
ほとゝ云あし　不審の所よれ云ふしと付る
ありよくしるん云説しまとておもんはと云なり

親のたちかはりしれ訓　二まてひこ道物絶な
とは大勢は物知もたちかはりなし又は愚
の字のへうちに又よ又下類しこいされて
や有はこいふくさ道ゝくさ作さりや
いくちくすゝぬよくしひ　さのとやうしのぬ
ひ孫もとやしなり
よびめく　今よ言うしかうぬさまなり
まして訓さゝはちゝぬ人なさき　若人は
旦と侍ひつきらひさゝするとされのりける
大学ひさしつり給ふ日は　寮試の日試なる
まうりんに　大学寮の門なり

座乃ちこつ試　寮試の時は長幼とりて席
とあらてあれよ冠者の君をも学生とこの
末座り列し給ふなり
りんかんきこゝすし　一孫　文人擬生は擬文章
生しなる事とこしつしめしは官試ひ才
り称くよしなり
弥家代女御とよ母家をも　藤壺をも中
宮とは弥家とし給の給ひ立しやしなり
源氏のしらこつきり称しめ給ちんその　手
ら次しも源氏の姓と給ひつきま道元帝
王親王の御女とは皆源氏よ成て人は為

雲ゐさしつゝく秋好の御ほうへん　友氏公
あし路ちんすゑハかとりへくそうり
弘徽殿　うしのおとゝの息女なり
今の式部卿ハく　むかしのしけ氏父子之
桃薗の宮此閑院よなり女ましなり
一本
八箇卿の中式部卿ハ親王なりて八ちり
まて無部卿しハ左近の宮なりの宮なり式ア
ハいはゝゝ内さまれし部丸
御方なく　式部卿此御女の女御ハ
花御雲乃御めいなり
御さいちいの　母御息所ハ引さへめく

きこのいちいとけなり
御とく太政大臣ハ　を　内大臣將太政大臣例
忠義公兼通任太政大臣　元内大臣　但関白之
之兼通ハ後ハ兼通卿之信長平清盛公なと
内大臣より任相国をるなり
おとゝ頂きくへあり御家のくらなり
ちしの御とく此息女のそのて之　源氏公
君のきくへりとも御くく頃ゐしなり
上人とそりけくなく　雲井此原ハそのへ
御とりよりしとハ弘徽殿より御くよりしきうして
うる井の原の母君と兼通しとも　なりてうんと

とりあ遙ハ家をしらすしてなるへし今そ
あそんの大納言ハ小野宮之孫藤原実資ハ右大臣
後の親と申つかん　まへ父よりもこんすとそ云
よるしなりてハ兄とそ云いふそくそくよ
此ハめいよあり書にしもありけれとも
西くれ大饗にハ　大臣になりて此こそあすへ
ひとつ女の子さよふに　内府の後なり
物のらうれ後に　明石の入道延喜の比
平なりすしてかひしなり
なきさの事　ひとのらうさすしいよう
諸臣よくりしきうりハ見へしを大の平

みくとをてうしや大かみの御相へさい
たいてしらうへて頼あやさくとしてを
大かみの御相へあやしくとハきこくなり
ずして云へなりしこもなりみへよハ云すり
なりかめあらし葉なり
女ハさく仏の縁　これ此神々の後へしと君
とそみしハうし井戸のつのなり
かくいふ筆人の名そ　明石の中宮おほすり
なり給しなりぬらんすりと念なくとそへ
よりめ女の後へを　かぞハ美すへ　秘のうへ
とひらうい　とりちくよなり

すこし心もあれ　大家の御組へのあさ
らいさぬあらはしたるしは古摂政のゆかり
よしふさしの給ふへ大家と源氏と又な
き御おぼしいたせしこと弘徽殿の女御
のおもしめ給ふぬうらんすゝしゝらくこと
あさ御中給り
こり給ひ　筆取由べ　こり給ふは引附た
のみとふあつまふすへ也　称へ
乳しと聞はしたり　すしはあいするへ
利らのこゑへの中くいまあらぬあると
嫌よありて打しあら調子之中く今

めさぬるしは　秋琴のまなりやま
とゝいれあくいふなり
御前の木たちへのこずゑに
(石) 落葉俟微風以隕風之力蓋寡孟
嘗遭雍門而泣琴之感已未何者
欲隕葉無所假烈風将隨之泣不
足繁哀響也　文選豪士賦序
御まへの木たちはちるとしぬらしいゑて
風のちからもすくなくたりしにりよりて
よせて書しあは組あつくこゑあり
雍門周は琴ひき弾ひて今の内蔵は和琴也

引哥は氣はきんのゝんなく稱そへなり

秋風楽　調子

さえのけしりあまりめの　命章しあゝみ

みめしハうきよし繪合のまきみとミしら

やらあらんとそる好へあく　源氏君此しミし

源とさてなれハ子細ゟあらんとあり

世此事ひもみらのハ作くらるゝなり

舞楽なしも皆道てありてつみちれ

すゝ文をひ伝ぬとも　移風易俗

莫善於楽とといへり世治納治

みハ礼楽しきくハなつしとなり

ちくしゆらしかへ次　さくらくし上云

なみて第二と折合ての有より云々七と七花

萩の竜ほり寺て　む衣之へらんや衣さぬハ雅

原より此りら萩の花ほとり　俗呂定衣　冠ハ冠者

君のあさ記の名説あらくめ好りんての

とゆりひもせくらしりら衣のへのことと

らくひみ御ゆなり

あなくく　ひのる君此源とへあり

御遊と源事　もほくうもなきのりて

子孫まりてらしハ　此君ハ知れ此文ハ知学

ふつりしき源氏源と　すゝしさとく

みちゆきしいふになりくし
行こく　御とくし給へかしありてなき
みかすぬへあさやよきハ君恋つまに
同じ家なくハ絶ゑなりてしりや
涙めをかくし給ひたりけれハ　又御とも
きぬまよ涙にさそふなり
なかきみちをりしあかぬなかにひまにひ
さしてもなきさ人もなしいふこころなり
御ともに関ゆるまで行も　くも思ひ
給りとのきぬまよなり
かくれなりなし志も世をひて　わくへも

中納言にしてけしくゆし三位に
去りにて絶しとなり
むなしき事なく　あこなれつのなと
とくへのいよりや少しなり
御門乃御いもうと娘　河　康子内親王 延喜皇女
村上の帝此御時北の政殿よ御りしより
はかし九条の右大臣桐壺つくさいつし世をひ
三宮のみ後なりハ歌てさいり給ひなり聞
院太政大臣　三季　母なり　世継にあり
大納言殿ひ関給へん　あそしに大納言
の小一条の井の君のそくのものなり

世くれくへきよし　此めつらしさたりつへし
きらん有けさりけしめて　ひとしき人あら
へまつハ　夕きりの事なりけるくま
おへりかしたり　大宮のころあり
是ありとひたらんきこゆひりしよれ
色へかし　夕霧のおもひハつゝ井の居
より稚海さりあつ人とりて地上物とて
大宮の御へ申たり又雲井の雁はい
つやこのとしひなさき女の筆かりしよ
地りへしたりと文字とりまても法にして
きめこめし　かしおりひ多まへいとて

おもひかひてかくへし
御心の内とかんをしりあらハ　地をしれ人
世中さハ帳おもんてん　双魚のこともん
ひと衣を　秋風楽の衣の事
雲井の衣をおもしや　霧ちりき雲井の
かりを挑しやるれを次枕の衣なりん
御めりてこたりけり　雲井の衣のめしの子く
あらたまちるぬひしをあしぬるせく
ききや　ぬきしのこともたり
き衣中よおもひのことし　源氏のけさへ
衣の衣まいらしなりき彩へなりくしつ

はすゝ萩に風の吹わたるにしたかひ
なしや又ハ女君の御詠と聞なして色
よはさ進てあはれの深さなり
よらぬまにをみなへし
露をもさへ家かたる　聞こしめしも
風の露はさむけしく　吹よれハ露も
こほれ秋風と名付しとこそはけるを
まうさる所に伺候ありしとも
時なる遣語ハきりけり　女房者なれ
きこめされきもうまし侍るのも思
ひ給ふ成とも御ひたり遣ぬとハ久

きりつほの御巻中の事なり
男君をとすへし物かたりハ年十七歳にて
夕霧十二歳雲井の雁十四歳なり
此方なり　四君なり
多く大方にて云ハしき御ことハ多く
女御のかくれ給ひぬ御事しきこえたり
下の御心もむつかしくきこえてあり
さるへしと思へよ後にさる事世の中ひて
中々よそに遣給ふとしハいへとさかひて
とあり給今のまゝにて御心にくき事なりハ
りとも此所にしつきに遣ハあるまし

あるくしをしハ女御の御方の人々とも
のこりなりうて牡の房と儀に添し給ふ
むかし人いてとおりへ参進してそつ
くりいでし給ふなり
うやしむつり給ひて　今しまつりしくに
給ふ作さなり致仕のゆくのこすなり
きくたり　作しくさしるてら孫此へや
鶵の字とさくたりとあり甬母あく
ころ雛ハ物のむかしハ参進しけるとれ
まりまてとくれなり礼記内則篇に
庶子の父母につかへまつる時しおよ

くさる物の一なり冠者君の学問
さく父母に作さまいる時の礼儀ハ
知給ふんかくひはさして里一と見えり
さらへ作らんも有へくれ作し記
きりたてあていふハ説文段注りてとき
云ふ説にあしはるハ説據ハ凡て作らん
祀より物をかれし母子　大宗の祖廟に
母子なと蒸きの事なり
ちかしこ申りて　此くのそのに男つ
かう作むかへにまとりあひてなり
今しあるに給ふてまくすりハたつらなん

なきあとねがうなる事ハみな中納言なり
とかくしてしうあれども給ふべく
人のへしうれ紀也ハあ事　大臣の御詞也
けふハさひし　一月にニ日あまり大臣へ来
給へとありしに会してさひさこそあり
内大臣の君から　女人なり
左近衛権中納言　摂政の息なり
久しく言ひし之に　内へまいり給ふつかり
雲井の后のもとよりまいらん用之
あくへよとめなり
人の詞のすてしめしく　久なり

の官位乃事なり
かくなりより見て給へとしてこめしう
前のきもしこめしうといふ事の多し
ゆきなきのといふやうの儀あり宴の
詞しハまだ紀也にて存ほやうなりのに
見る目字なり
見るてく京わりけひ給ふやいつちなてん
おりしま後而まで三りあひあてかく世給ふ
八帳の仰なり候　蘇武別李陵之時
携手在河梁遊子暮何之　文粋に似たり
いくむつしきことのな　大臣の御詞也

いてや物けなしと　冠者のめのとの詞也
わか君やとハ冠者君をいふなり
御めのとまいりて　女君のめのと也大納
言殿とハ雲井の雁のちゝの事といへり
物のはしめの六位宿世よと　未五位に
ならねハ六位といふ縁ハ六位な
るへしすくせハ夫婦のちきりといへる
紅の涙にふかき　あさみとりハあさきの
ことを見ん程にハいひおとしけるハつらく云へし
黄門ニ事よ参て出るといひなこゝろへけれ
掛戸のあけたてなりうき我たちし跡

あけハ五位の袍なりけふこそ浅よ
見給へけりや　云々
多くしかれきれの　いろくしとハ侍
ゆふかめけつといふんめなり中の衣
そしハ中の緑なりといふへなり
さらに海の色からも　女君いつく給ぬ
めのとあしとの事也
大殿よハたとへし女房ならんはかりのまへよ
一説
五節ハこれもよ娘なとめしよなり人に
ひけ作りて之細ぬ文をよ八国
司よる人にこう進ともうの　内裏なり　又

節にて寄りを作り
四つりの乗れ　五節とはさしる乗のことなり
左衛門督　内府の才なり　他腹と見ゆ
又の五節は良清　殿上の人のさいつ比
はとうへの女房といてなり
一禄
殿上人さいつ比は大内より乃うちなり
今まうくめさせ給ふ家仕ふへく
一禄
女房の舞姫めしあつかひて善相
いつく見んと今えより
殿の舞姫惟光朝臣の　一禄　是ハ受領也
但源氏の君れうなりけしなり

さいたあハ　ほとくいたあよしなり
今日まで取れ出てと是よりなくるやなきと
つらうひ給へ　上相は清縁かしくるゝえ
り出て給くとありま遊てと入なると
らをし取給へすなり
多くりてあし用意したりてる　人ハ
見めるとらかとうるねと入たより
舞姫しつき添りて　源氏の清まく
くり体所なまへの事なりや
天りまれるてくそひめ也　天照大神様
やくる家人色とハ天人の舞姫といふ也

めはワさる時ハ神事に付てあり
されハ此の節ニ付たりといへり
久しくたえたるの節にてといへ　此　しる女子の神事
此山の乙女の久しき世より思深くよ
まりしそれとて乙女つる　きよかりと
それとてかりつる人とも舞内のつゐやく
りたらくほあり
あとしれて　惡き事もゆるされたる
五節きぬあまりし是ハ　也　十一月中丑日舞
姫参入　戌暁参　即有帳臺出御寅日御
前試卯日童女御覧辰日節會舞

姫進舞　也　装束丑日ハ赤色唐衣寅
日ハ青色唐衣辰日ハ青摺唐衣赤紐
日蔭鬘等あり青摺ハ小忌之丑日舞姫
参入　戌暁参　帳臺試事寅日ハ前
試事　又童女御覧殿上人事同殿上淵酔
事卯日新嘗會事　号大嘗會　辰日節會
事　豊明之　巳節會事又ハ新嘗　即是明之宴
其物ともにみなましう　人のすてをもよく
見えぬあたるなり
されハこのあまり年あり　前の詞よりは
年五節あれとも　まれにはやりしかりし

つもりもなりゑへて人のやせをほしより
されやうかなるといへり
辰の日にくれつゞき　節會に出る日なり
し女子を神さひめかし　かつさ世に出ると
ハ源氏の乙女事なり
ひていへるなるのから　蘿乃けと日の
けとあるへき豊の舞姫日ひけのいと
とうさしひすらし足よきとりへ白糸
と結てくるなり　神しらひけえをと八日
ふまへきより　ヘハ源氏よあひかたるまし
日ひけのかりハ豊明時用物なり

あ紋ほりれたと　辰日ハ書すりの夜と
おりし世くひけ　和　あ紋を書し引く
とりてをんとはりあるへ
こすゑふ見ほとほつらして　さのとかめね
書ほさかりくしたる君人のけとひ付て
ハ神しせていへり
人の目に海ひ付てを　人とは大節
のかなり人のめそてもかしあるなを
ありて進ぬ論人の事なるへし
こすくるし　こそくし執なり
あかとのハつる滿はのかとハなかなを

前斎宮御参の時お雛波有禊斎院
退出の時ハお幸清修禊是皆神事と
ところ解除之五節の雛波幸清此禊是
小忌ハあらかしく侍り
五節ハ内野はくちらくへとすれ
其人あらぬと　　宇多御制ありし也
そのくさ世路かそしハ御ころめハ何也と
五節よまいりしめしとハめしとめ路之
その人あらぬハ承りてかくてなれ人之
ましの　和　まろとしいへうふなり
凡をりのうてやう　衣乃名といふ綴

あけおきみとりとハくちきの君いつ
くさいあふ名之と何とあらく書給や
日のけもミろりけめや　ひのけハおほすき
まとをも日のけていひ考れ常にその日執
八拙作きやうし凡うともあなれハうき
仙ハミろくともうへてつるあていふなるへし
天の羽衣も　又日のけの三んなお翔ぶ
まいるの時用ゐ物なり
ちゑめし　主人也といふうへみなり
いろしろしき君の御さまへあり
帰されなるらんといふへへや御さき

ことぶきいはれたる事もあり
きむち　なむ比なり
殿の御仏名とさまてゝ　惟光源氏の御仏名
いまなりくるりもさ楽あるらんとゝへ
と屈りていまりや
略きへらく　哥の詞よや承へし
舞のあい　乱散罪れすへ
ゐ海いまゐり　うたれへん几帳といまへ
是ハさくいは君一所れ　三条の宮なり
冷いさんともにあるれしなし進ハ
太政大臣な進て　節会なともも

所と渡きいり給るねなり
ちかきの秋く　内の儀式とうりもハ
あ餘馬と引ふたる寮の次以下借其
すの儀式とうつしたるや昔れなあし
とりも事のゝへかきらハ　忠仁公の例し
もれまさりあるしなり
二月廿日あまり　朱雀院の行幸例
見花宴　源氏三十三歳なり
非父子之世行幸上皇宮例
天長十一年正月二日仁明天皇幸淳
和院見国史　天慶十一年正月四日村上天

皇嘉朱雀院但母后御同宿謁右近

千柏殿　見李部王記

正月　きさらきとよむへよつや

あはなひ　を　青色の袍下襲ハ桜重或ハ

柳重を着用するなり

御門ハ赤色の　内宴ハ日ことに五才一ノ卿

着あり文殿上賭弓すゝのことく

ワきとの文人をめさ次々その作しかしこ

之間しあり学生（カリ ミヤウ）一族　文人ハ儒者之学生

ハ今日及才をへきと人云をあつかれり

式部れつきのへらの多いとありて

を

御前の試よ勅題をなづハ定長應和

康保土の例と式部のつきとハ或ハなん

省此そのへ入学の元太学寮まて寮

試よ史記をよミて及才の後式部の

省なく課試をうくはて試よハ詩君

賦と作くなしむ及才人と文章の生と

補もて是と進士とし云り式ハ御前まて

勅題とらされて試らるゝ事ありく

務の者ハ詩章の後し或ハ省しあれ

へて御前の試し詩作りて及才し

なひて至士まありてやさて修徳官

小侍従か歌なり　見花る

とかむるき　ほとくとくしけるなり

つなかぬ舟の字なく　放蕩とは識しは詩な

とくよ商量する事をつまかぬなくさて

ほとほとへたけなりといへり

てならひともろすかれの　養すへは次すを

かくかしき道なくても　学文の道

なくてとやしなり

又きえりけるにてんや　花のえんよ

源氏の書嘗將まひ多まゐ（か）し給

物ほしいそ多かなり

院は源のかけさけり給ゆ　源しやく

なしえり多まかころれ

嘗れき之ほかとこは　霖ハ桐似ゝ進として

右院の物りしまきぬかとむつましき花の

とよ世多まよなり

そのへと霧へとりか　書としつけくれとハ

作文の詞華ひくまうてりかゝとくへ

蛍兵部卿　ほたるの宮なり

いかにしてか吹ほとゝきすかへ　当代と称し給

ハなりき進ハあさやかよ養しあま

かやしあり

鶯乃むかしを遊く　御製承和御代の
昔しをきゝぬへきせとあそひしけるなり
御まへにてけらし　御門院ましく内にいらせ
あまたなるをあつかはれしや　其席にて
殊にしくての舞をとてはなれける事
にまなり作者のこゝろ集なり
楽府見ゆくて　庭とけかと前へめし
きゝの殿上人　あまたさくとさくる人
いり進にも　催馬楽呂なり
此は只人あらは　御抱のそのなり
大名　而名に出家八花雲との御事なり

名八程脂もしさる訖ていつし此はし出へん
むかしのそのひぬまふなりやせとおり
恋つの八後悔ありの是とて不応しと
乃しひ此はし出のふ　なり所存しれ
きてもむしと此りし出ぬましなり
院にもくへくよしうらさくへくさ
あらそひとこれやうのこゝろなり
進士ひなりのひぬ　秀才あるかいハいり
進にも進士といふなり
きう無いの人　夕霧も三人の内と見へたり
六條京極乃　中宮八秋好の先信日宮

ありけれハひろくほくゆるくあれすり宴せん
りとり給はれしといへり
たとへハ言ひ出しかるに　なほ給はりける
御中なる所ハえさしてかなはしといへり
年をへりてハ　源氏三十四宴せらるハ家
ハこの次まゝ冬のけしきのかなしさにまいりにひ
をかなり朱雀院の部寿ハまたみちのこと
そのまゝ一家々きてたる事を申し也
降伏遠なしあるまし
此御いそき　四十賀のうちに御年三八
年足てし賀ハ祝なり此のハさくけり

おく宴ハ物経りのをほくハ一辞　賀依先
親不同なり法事には薬師経寿命
経大般若の一のあり
ひとひ年遊して行ふゝめ　式部卿ハ次に
のけふは如何なるなりしと源氏[illegible]なり
むらさきの上へゆくひとりさ法花なれ
ことも恨へよ年しとハ[illegible]をゆかるゝあ
経りし給ふなるへし
女御也　むらさきのうへのいりかゝりしなり
とりを八殿の折りをしへよ　此進ら
すなりけるむらさきのうへするをまゐりなり

蓀のちんさいとハむらさき也ちとり　善法
このさかへとし秋とまさてしぬへきよりし
方よさるむすハよろしつくらん御し
いりとの水ふ給くすまし扇り水のこと
まさ給へよ　ちゃやりとさりて水の
とし御さらへまさしむ御し
さゝ野大将乃　出てとはめんとて秋の
かりしあさま一乃石ばいかり
むとく　無徳
くたに　若丹　牡丹を云いつ迄もなりけりの物
此乃御し

これハはなのちくさ越りて　なふの西とい
ふなき物とく書きのあれ
中家ハ乃へ給よ　源氏のまれよの御侍
いさいな迄とも　すらしちてかり給ひて
乃えあり世とハよろけおひそろへる
あてりて　みゆ
帥東十五　出東乃卩なり
と一方の　花ちる里にて
あてしのこまひ　めしくとありあてく
こまやひさせるひ字あらしあり
さハいと御てし　世のうきりとありてゆらん

こゝぬなしハいへとけし尓ちしやしなり
ワゝハあこあこゝん多のとり物ことて
まゝハ壽も女のあこめハきぬよりなれハ
さめられてこゝん多ハ紅女のすそとこゝゐ
つき子ハうへよ着すられなり
こまれりしきこまし給ふ也と　歳ことな
ゆにさけるかりあれもとこけよてゝわなり
にゝ南りきふひ有也しれハ　まへの書とと
もひとよ此女房なしハりしりありと
尺しめりの雅ことなしまても殿とのよ
吾さらなし房のもしあかくとなしけり

にゝ書まりての八　心かゝとハ書ゆ
あひすりと　にゝゝ也ハ文のさらなん
かりしらき可浅もこと給へとりや
凡しちと紅葉ハかゝし　暮れの松乃
春の多ありかりひくゝふ也て風も
そちらくあさ狂ともんなし給ふかや
花のひよなゝらく也てよ　花の
親とさよりかしてといよへなり後こと
ありけ浩くとりハこてふの巻かくれん

元字より